

1. DeForge, R., & Shaw, J. (2011). Back-and-for-grounding ontology: Exploring the linkages between critical realism, pragmatism and methodologies in health and rehabilitation sciences. *Nursing Inquiry*, 19 (1), 83-95, 2011

この論文はカナダの The University of Western Ontario で「健康とリハビリテーション科学における質的研究法」の授業をたまたま一緒に受講した博士課程の学生2名が、それぞれ自身の研究パラダイムを「存在論的-認識論的-価値論的-方法論的」関連性の視点から論じたものである。最初に DeForge, 次に Shaw が、批判的実在論とプラグマティズムをパラダイムに、地域に根差した研究課題の方法論の選択をどのように行ったかを述べている。批判的実在論の階層化された実在をプラグマティズムとの関係で位置づけることで研究計画の基盤を形成し、また、それが研究の結果を支える基盤となっていることを経験的に述べている。結論として、単一のパラダイムではなく複合構成のパラダイムに基づく研究の可能性と課題を指摘している。

博士論文に取り組んだ若手研究者の経験を中心にした一風変わった論文であるが、その分、研究における存在論の重要性が伝わってくる内容である。reflectivity (内省, 自己洞察) が批判的実在論とプラグマティズムを関連づけるカギになっている。特に Shaw の担当部分がよく書けている。

2. Porter, S., McConnell, T., Clarke, M., Kirkwood, J., Hughes, N., Graham-Wisener, L., Regan, J., McKeown, M., McGrillen, K., & Red, J. (2017). A critical realist evaluation of a music therapy intervention in palliative care. *BMC Palliative Care*, 16 (1). DOI 10.1186/s 12904-017-0253-5, Open Access, 2017

この論文は英国, 北アイルランドのあるホスピスで行われた、緩和ケアへの補足的セラピーとしての音楽療法についての批判的実在論に基づく評価研究である。16名の患者が日常的に必要な事柄 (needs) に対処するにあたり、音楽療法がどのように助けになったかを問いに質的研究が行われた。緩和ケアスタッフ (医師7名, 看護師7名, ソーシャルワーカー2名, 関連保健専門職3名) を3つのフォーカスグループに分け、また、担当の音楽療法士へのインタビューも行われた。分析の結果、音楽療法には身体的、心理的、感情・情緒的、表出的、実存的、そして社会的支援の複合的メカニズムがあることが明らかとなり、全人的ケアを特徴とするホスピスのコンテクスト (環境文脈) が音楽療法の効果を促進し、多くの患者がその効果は感じていた。

この結果は調査前の文献レビューで確認された内容をほぼ追認するもので、新たな発見は示されなかったがエビデンスの強化にはなっており、研究によるこうした確認、強化の重要性を理解できる論文である。また、研究の限界からその先の研究への論述も一般化、実装可能性の点から参考になる。Porter は Clark と並び、批判的実在論の立場から Pawson らの Realist Evaluation を批判している主要な論客である。

3. Harwood, L., & Clark, A.M. (2014). Dialysis modality decision-making for older adults with chronic kidney disease. *Journal of Clinical Nursing*, 23, 3379-3390.

博士候補生 Harwood と指導教員 Clark との共著論文で、慢性腎疾患のある高齢者が在宅透析の意思決定をする場合について、個人 (エージェンシー) レベル、(社会) 構造レベルの相互作用の分析から促進要因と阻害要因を探索している。研究デザインは批判的実在論に基づくエスノグラフィーで、13名の該当高齢者への個別インタビューと慢性腎疾患クリニックの保健医療職4名のグループインタビューでデータ収集され内容分析が行われた。データ管理には NVivo が利用された。健康状態、ジェンダー、知識、価値観、信念、過去の経験、志向性、ライフスタイル、活用可能資源などが影響しており、不安定な健康状態にある高齢者が在宅透析を選択するには、家族と保健医療専門職のサポートが非常に大きな決定要因であることが明らかとなった。理論枠組みは Pawson らの Realist Evaluation で、抽出したテーマごとにデータの引用を使った記述をしている。

Clark は Realist Evaluation を批判的実在論から補強する立場で、上記の Porter ほど批判的ではないが、この課題に対して看護研究において主導的役割を果たしている研究者で、多くの論文を発表している。

4. Grigorovich, A., & Kontos, P. (2019). A critical realist exploration of the vulnerability of staff to sexual harassment in residential long-term care. *Social Science & Medicine*, 238, 112356. <https://doi.org/10.1016/j.socscimed.2019.112356>

この論文は、女性ケアスタッフが日常的な業務の際に利用者から受けるセクシュアルハラスメントについてどのように理解し対応しているのかを研究したもので、カナダのある長期ケア施設で26名のスタッフを対象に観察とインタビューを行い、また法令規則、研修内容、関連する管理指針などの資料も活用し、その結果をエスノグラフィーにまとめたものである。批判的実在論に基づいた分析の結果、経験したスタッフがどのように意味づけているのか、保健や職場の安全に関する諸規則、教育や研修のプログラムの規範的前提などの間には複雑な相互関係が構成されていることが示された。結論として、利用者からセクシュアルハラスメントを受けたスタッフは管理規則と自分なりの解釈の接点に置かれ脆弱な立場 (ケア者であり同時に被害者でもある) にあること、そのため有効な防止策には多面的なアプローチが必要であるとされた。

これは長期ケア施設のセクシュアルハラスメントに対して批判的実在論が用いられた最初の研究であり、経験したスタッフの自身の受け止め方の分析に reflectivity の方法である「内なる対話」(Margaret Archer) を用いている。データの分析では構造的、文化的、個人的レベルでの創発的特性を同定し、利用者によるセクシュアルハラスメントに対してスタッフがなぜ脆弱な立場に置かれるのかについて、アブダクションとリトロダクションによる推論が活用されている。他に、テーマ分析方法や NVivo などとも用いられ、多彩な組み立てになっている。